

高校生の複数集団への参加

—居場所とアイデンティティに注目して—

御旅屋 達 (東京大学大学院)

1. 問題の所在

本研究は、学校外教育の現場を対象にし、そこに生きる高校生の仲間集団、集団への参加の様子を読み取り、彼ら彼女らが、どのように集団に対して関わり、文化を作り上げていくのか、その集団はいつい何によって支えられているのか、ということを読み解き、居場所の再定義を行うことを目的とする。

子ども・若者の生きる場、というものは多種多様でかつ重層的である。さらにそれぞれの活動や属する集団を見ると、そこにはさらに多様な集団が存在する。彼ら彼女らは必ずといっていいほど複数の集団に所属し、その中で多くの人とかかわりを持って生きている。このように多種多様な集団に所属している高校生たちはいったいどのように集団を見て、どのような基準で仲間関係を築き、その仲間関係は彼らが生活を生きていくうえでどのような影響を及ぼすのか。多種多様な集団に所属していく中でどのように自己を保っているのか。以上のようなことが本研究の主要な問いとなる。

以上の問いに答えていくため、本研究においては「居場所」という言葉をキーワードとする。さらに、居場所が形成される集団を取り巻く「文化」、そしてその文化との関わりあいを通じて形成される「アイデンティティ」といった言葉もキーワードとして扱うこととした。

2. 研究の方法

フィールドワークと、インタビューを併用した質的研究法の立場をとる。

- ・ 期間：2002年9月～2003年9月
- ・ 対象：A (民間の教育団体) の教室に通う高校生
- ・ インタビューの概要：計4回、2003年2月、7月、11月、12月に行った。主に学校、家庭に対する関わり方を聞き取ることを目的とした。

観察は、高校生たちがどのように集団と関わっているかを記述することを目的とした。

また、Aの活動に主体的に参加している者、及び彼ら彼女らの学校での友人を対象としたインタビューを計4回行った。ここでは半構造化インタビューを行い、できるだけ自由に学校における集団とのかかわり方、学校と学校外の関係性について話してもらい、複数の集団を彼ら彼女らがどのようにみているかを考察することを目的とした。

3. 考察

居場所は、個人がアイデンティティを表出できる対人関係性を表す。アイデンティティとは「私」が「私」であるという感覚の事を指す。その私は家で一人であるときの「私」も含み、集団内での他者から見た「私」も含む。この二人の「私」が同じものとして認識されたとき、アイデンティティは成立する(Erikson 1968)。そのためには自分で考える「私」が他者から承認されなくてはならなくなる。

観察・インタビューから得られたデータを通じて、以下のようなことがわかってきた。

相互承認が起きたとき、その仲間集団の中では自然な役割分担が生じていることがわかってきた。アイデンティティとは他者との相互作用によって形成されるものではあるが、本質的には非常に個人的で主体的なものである。「私は何者であるか」という問いの答えは本人にしかわからない。むしろ本人でさえ答えが出せないことが多いのが実情であろう。だからこそ「自分が何者かわからない」、「自分は社会の中でどのように生きていけばよいのか」というアイデンティティの危機が問題となるのである。しかしそのアイデンティティがたとえ一時的で、将来変容されるものであったとしても、それを個人が発信し、周囲の他者が受信、承認するという相互承認的

な関係が樹立されれば、言葉を変えれば、そこにはお互いの個性の共有という状態が成立することとなる。このように考えたとき、相互承認という基盤の上に立った居場所的な関係性の中では個人の役割が肩書き的なものではなく、自然発生的なものとしてたち現れてくることも説明がつく。

このような対人関係が成立した時、そこには自ずと主観的・客観的な存在感というものが生じる。例えばAにおけるリーダー的存在である者たちの仲間関係は、Aという場において、互いに認め合い、各々の内面を表現しあうことによって「自分」という人間がその場においても良い、という感覚を感じている。それにより彼ら彼女らは主体的な存在感を獲得し、居場所的な関係性を築き上げている。この居場所的な関係性は、その場をいわゆる空間的な居「場所」に変える。この場所においては、個人の感覚はその身体を飛び越え、その「場所」にまで広がる。身体と同じ感覚となった場所は個人に自由な振る舞いを許す。こうして、彼ら彼女らはその場における影響力を獲得し、客観的な存在感を得ることとなる。

また、このような居場所的な関係性はその存在感ゆえに、他者をも飲み込んだり、時には排除したりする。このことは集団の持つ共同体的な特徴を顕著に表しているといえよう。本研究においては、既に居場所的な関係性を築き上げ、それが圧倒的な存在感として上位文化を形成している場合の関係性の場合、他者はその存在感に圧倒され、外へとはみ出してしまう傾向にあること、しかし反対に普段アイデンティティの表出を行わない者が自我の表出を行った際には、周りの他者もそれに追随し、居場所的な関係性の中に飛び込んでいく様子が観察されている。

この排他的な行動は、学校においても見られた。集団の中に部活を除いて明確な共通の目標の少ない学校文化においては、居場所感覚が場所にまで伸び広がらず、関係性の中に集約されることが多い。例えばある女子の学校の仲間集団では、一旦相互承認が崩れると惜しむことも引き止めることもせずその時点で関係性が消滅してしまう。後に残った仲間がいればそこは依然として居場所として機能することになる。また、ある男子は学校において、部活のコミュニティの存在感に萎縮し、「自分は何もやって

ないから」、とそのアイデンティティを体の内に引きこもらせてしまったり、逆に学校の友人内における居場所的な関係性は他者が存在する学校内では発揮せず、あえて学校の外でのみ有効としたりする。また、このような居場所感覚は別の集団への移動の際にも後ろをついて回るものである。ある場において居場所感覚を持ちえない場合、個人は既に持っている他の領域の居場所を鎧として身に纏い、他の居場所を持つ存在感から自らのアイデンティティを防御するものとして機能させる。反対にこのような鎧を取り払ったとき、居場所的な関係性は新たなアイデンティティを形成し、さらに新たな居場所を形成するというプロセスを取ることになることが考えられる。

以上をまとめると以下のようなになる。

- ・居場所とは、個人がアイデンティティを表出することができ、それが相互に認められる対人関係性を表す。
- ・それは何か共通の基盤を基に生成される。
- ・ある個人が居場所と感ずる関係性においては自然発生的な役割分担が生じている。
- ・居場所的な関係性は主観的、客観的な存在感を生成する。
- ・居場所を形成する仲間関係は他者を巻き込むと同時に、時として排他的にもなりうる。
- ・個人は自らの居場所を拠り所にしてさまざまな集団間を移動する。
- ・居場所感覚を持つことにより、アイデンティティは文化を内包し、アイデンティティ形成にも影響を与える。また、そのアイデンティティの表出でさらに新しい居場所が形成されるという螺旋状の構造を持つ。

[参考文献]

- Erikson, Erik H, 1968 *Identity: Youth and Crisis*, W.W. Norton & Company, inc. (岩瀬庸理訳 1973『アイデンティティ—青年と危機』金沢文庫)